

地域英語教材 “15 Stories of Saitama-ken” (Ver.2) の開発と活用

共同研究

代表者：埼玉県／鶴ヶ島市立西中学校 校長 吉田 敏明

概要

本研究は3部構成で、平成14年度に開発した中学生向けのCD-ROM版地域英語教材“15 Stories of Iruma-chiku”（入間地区の15の物語）を第1部として仮説と検証の結果を述べる。次に、第2部は、題材を入間地区の範囲から埼玉県全体に広げて平成15年度に開発した“15 Stories of Saitama-ken”（埼玉県の15の物語）について起案、取材、編集、校正、教材化、配布方法などについて詳述する。そして、最後の第3部では、平成17年度に1年間をかけて開発してきた“15 Stories of Saitama-ken” Ver.2についてこれまでの教材と比べた改善点や取材方法、広報活動、生徒の反応などについて報告する。

1 はじめに

合併によって平成18年4月現在、埼玉県は71の市町村になった。この埼玉県の中で、南西部に位置する入間地区には平成14年度に15の市町村が存在した。この15の市町村はそれぞれが誇りとする歴史、人物、文化、伝統、芸能、自然などを有していて、現在でもこの流れを引き継いでいる。平成14年度に、この入間地区に在住する英語科教員12名は、この地域の誇りとするものを英語教材化する計画を立て、1年間かけて“15 Stories of Iruma-chiku”を開発し、地区内の103校の公立中学校に配布した。

生徒たちの反応には私たち研究開発スタッフが予想した以上のものがあり、地区内のある中学校では選択英語を履習している3年生たちがこの教材に大きな興味と関心を示してくれた。そして、デジタルカメラを持って地域に取材に出かけ、自分たちの手で英文作りに取り組み、ALTに頼んで音声も録音した

CD-ROMを開発したのである。結果的に生徒たちは、私たちの想像をはるかに超える、内容豊かな英文を完成して校内発表会の場で見事なプレゼンテーションを行った。そして、地域紹介のさまざまな作品を学校のホームページに掲載して、インターネットで世界中に発信したのである。

平成15年度、私たち研究開発スタッフは生徒の活躍の情報を聞きながら喜びの声を上げると同時に、この教材の果たす役割の大きさを確認することができた。そして、今回は埼玉県内在住の英語科教員を中心にメンバーを16名に増員し、取材範囲を広げて県内15市町の歴史、人物、文化、伝統、祭り、産業など、それぞれの地域が誇りとするものを取り上げた英語教材“15 Stories of Saitama-ken”を開発し、県内の公立中学校423校に配布した。

さらに、平成17年度にはそれまで取り上げていなかった15の地域を中心に取り上げ、数名のメンバーの入れ替えも行った上で、やはり16人の研究開発スタッフで、教材のバージョンアップを図った。内容はこれまで同様に、生徒が国際社会で自信と誇りを持って郷土について発表し、発信する力を高める教材として、“15 Stories of Saitama-ken” Ver.2を発行した。今回の内容は歴史、人物、自然、地場産業などに限らず、題材の幅を広げて文学、スポーツなども取り上げ、生徒の多様なニーズに応えるように改善した。また、生徒が開発した作品に負けないように、音声化も図り、ALTによる音声も入れた作品に仕上げて県内の公立中学校423校全校に配布した。

2 研究の背景

現代の英語教育の動向はコミュニケーションを図

ろうとする態度やコミュニケーション能力の育成に主眼が置かれ、そのためのシラバス開発や指導法の工夫・改善、評価方法の研究など、いわゆる方法論の研究に注目が集まっている、と言っても過言ではない。英語教育に限らず、教育の基本は「何を、どう教えるか」ということであり、この並び順は教育を考える際の優先順とも言えるものである。この観点からすると、現代の教育論議は「何を」教えるかという重要な部分に焦点を当てずに、「どう」教えるかという「方法」に走っていて、大切な教育内容が二の次になっているとも言える。こうした時代において、「何を」教えるべきか、ということをしっかり論議することから始めて、その実際の事例を掲げて、その効果を検証していくことは時代の急務と言える。

2.1 教材開発の歴史を振り返る

戦後の教材開発の歴史を振り返ると、日本経済の復興と大きく関連していることがわかる。戦争の痛手により物資が不足していた頃、教員は教材、教具の不足に耐えながら、自らの手で教材作りに取り組んだ。生徒の喜ぶ顔、感動する顔を思い浮かべながら、「何を」教えるべきかを考えてガリ版と鉄筆でプリントを作り、手作りの授業を行ってきた。

やがて、印刷機は手刷りから機械に変わり、効率も上がってきた。さらに、青焼きコピー機の時代から現在のコピー機へと進化し、教材が簡単に作れるようになった。また、教材提示についても、トランスペアレンシーにトナーを焼きつけて OHP で提示することもできるようになった。視聴覚機器に関しては、テープレコーダーやビデオの進化が英語の授業に与えた影響も大きい。

これに加えてワープロやパソコンの出現により、視聴覚関係も含めて教材の保存、改変が簡単にできるようになった。また、インターネットの普及により、イラストの取り込みなどに始まり、音声付きの教材をダウンロードすることもできるようになった。このように機器の利便性はますます向上し、教材開発の可能性も大きく高まり、予算や時間があれば多種多様な教材を作ることができるようになってきている。余裕のある教員にとっては、教材業者の提供するものに匹敵するような、独自の教材を開発することも可能になってきている。

しかし、中学校の教員は多忙である。本来は家庭が行うべき読(しゅつ)や体験学習に時間をかけたり、

思春期、反抗期に差し掛かった生徒の指導に追われたりして、教材研究の時間すら足りないという学校があるのも事実である。こうした学校では自作の教材を作るよりも、既製の副教材などを生徒に持たせ、その題材の配列どおりに教えたり、「教科書を」そのまま教えていることも事実である。

2.2 教科書の歴史と教材作りの課題

日本経済の発展とも関連して、教科書は生徒に無償で供給されるようになり、各教科書会社も競ってよりよい教科書を作るようになってきた。まさにしのぎを削っている、とも言える。例えば、文法項目の配列や語彙の選択も生徒の過重負担にならないように検討が重ねられ、易から難へという配列も定着してきている。題材に関しても、広く世界に目を向けて英語圏に限定せず、東南アジアやアフリカの国々なども取り上げるようになってきている。また、外国から来た登場人物が日本食を食べたり、日本文化を体験するなど、自国の文化に目を向けさせる内容が少しずつ増えてきている。さらに、生徒が漫画やゲーム世代に生きていることをとらえ、会話表現についてはイラストや写真を多用して、わかりやすい場面設定がなされている。ある意味では至れり尽くせりの教科書が提供されている、と言っても過言ではない。

しかし、ここで私たちが考えなければならないことがある。それは、現代文明が追求してきた利便性の問題である。確かに、現代の家庭には電化製品が所狭しと並び、スイッチを押せば機械がほとんどの仕事を成し遂げてくれる。私たちはその仕組みを考えることもなく、無意識に使っている。使い勝手だけを考えると、私たちは物事の表面を見ているだけで、その中身を考えることがなくなってくる。「どうしてだろう」、「なぜだろう」という疑問が消え失せてしまうのである。

残念ながら、このことが教科書にも当てはまるようになってきている。教員は便利な教科書に寄りかかり、内容を吟味することなく提示してしまう。そこで、生徒に「なぜだろう」、「どうなっているのだろう」という疑問を抱かせることを忘れかけている。生徒の方も、現代文明にどっぷり浸かっているため、改めて教科書の内容について考えることもなく、与えられたものをそのまま受け入れるだけで、疑問を抱いたり、その疑問から課題意識を持って、単語や

英文、内容を調べていこうとする気持ちが失せてきている。

こうした時代背景を考えると、私たち英語科教員が取り組むべき課題が明白になってくる。それは、目の前にいる生徒の実態を的確に把握して、私たち自身が教材を作成していくことである。戦後の先生方は物資の不足する中で組みまざるを得なかったわけであるが、現代の私たちは「何を」教えるべきかを考え、英語で物事を考え、英語で表現し、英語でコミュニケーションを図ろうとする生徒を育成するための教材を開発していく必要がある。この考えのもとには「教科書を」教えるのではなく、「教科書で」教えるという理念があることは言うまでもない。

2.3 教育課程審議会の答申を踏まえる

平成10年7月の教育課程審議会の答申では、次の方針に基づいて教育課程の基準を改訂することが提言された。

- ① 豊かな人間性や社会性、国際社会に生きる日本人としての自覚を育成すること
- ② 自ら学び、自ら考える力を育成すること
- ③ ゆとりのある教育活動を展開する中で、基礎・基本の確実な定着を図り、個性を生かす教育を充実すること
- ④ 各学校が創意工夫を生かし特色ある教育、特色ある学校作りを進めること

4本の柱の中で、第一にある「国際社会に生きる日本人としての自覚を育成すること」や第二の「自ら学び、自ら考える力を育成する」ということは私たちが教材開発をするときにまず考えなければならない視点である。また、「ゆとりある教育活動を展開する中で、基礎・基本の確実な定着を図り、個性を生かす教育を充実する」ということも教材の中で具体的に位置付けていかなければならない。これらのことはまさに時代の要請とも言える。そして、この答申を受けて現在の学習指導要領が編成されたわけであり、その解説書の内容も確認しておく必要がある。

2.4 学習指導要領やその解説書の内容を踏まえる

現行の中学校学習指導要領は「言語活動の取扱い」の中で、言語の使用場面に触れて、あいさつ、自己

紹介、電話での応答、買い物、道案内、旅行、食事などを例示し、言語の働きを「考えを深めたり、情報を伝えたりするもの」、「相手の行動を促したり自分の意志を示したりするもの」、「気持ちを伝えるものの」の3つに分類して提示し、言語活動を展開する際の指針を示している。

また、使用場面については、生徒の身近な暮らしにかかわる場面、家庭での生活、学校での学習や活動、地域の行事など、というように大まかな範囲を指定している。

この中学校学習指導要領を受けた解説、外国語編の第2節3の(2)では教材選定の観点を次のように示している。「教材は、英語での実践的コミュニケーション能力を育成するため、実際の言語の使用場面や言語の働きに十分配慮したものを取り上げるものとする。その際、英語を使用している人々を中心とする世界の人々及び日本人の日常生活、風俗習慣、物語、地理、歴史などに関するもののうちから生徒の心身の発達段階及び興味・関心に即して適切な題材を変化をもたせて取り上げるものとし、次の観点到配慮する必要がある」と述べている。

この観点というのは、「多様なものの見方や考え方を理解し、公正な判断力を養い、豊かな心情を育てるのに役立つこと」、「世界や我が国の生活や文化についての理解を深めるとともに、言語や文化に対する関心を高め、これらを尊重する態度を育てるのに役立つこと」、「広い視野から国際理解を深め、国際社会に生きる日本人としての自覚を高めるとともに、国際協調の精神を養うのに役立つこと」とある。私たちが日常使用している教科書は、この観点に基づいて編集され、学校に提供されている。そして、私たち英語科教員は採択された教科書を用いて授業を行っているわけである。

ここでも、私たちが考えなければならないことがある。それは私たちが常にこれら4つの観点を意識して教材を作成しているかどうか、という点である。与えられたものを、与えられたままに「教科書を」教える方法では、「国際社会に生きる日本人」を育成していくことは不可能である。そこには、常に現実の社会を見つめ、生徒の実態に基づいて、どのような生徒を育成するか、という明確な理念がなければならない。

私たち、「15 Stories」編集委員会はこの時代背景を十分に理解し、現代の生徒が真に必要としている

教材を開発することを計画し、現実に提供してきた。この論文では研究と実践の成果を詳述し、各都道府県においても生徒が必要としている教材を作成、提供していけるように、計画から配布に至るまでのノウハウなども含めて、持てる情報を提供し、科学としての英語教育の発展に貢献していく考えである。

3 研究

3.1 研究目的

3回にわたる地域教材開発の取り組みは、埼玉県という限定された範囲の中で、この地域に住む生徒が実際に必要とする教材を開発して、中学校の現場に提供することをめざしてきた。そして、このような教材を提示することにより、生徒の英語学習に対する意欲が高まり、課題解決のための自主的な活動が展開され、ひいては英語で表現する力も高めることができればよいと願って取り組んできたわけである。このことが4年間にわたる研究の中心的な目的である。

また、この取り組みを正確に記述しながら、開発した教材が生徒に与えた影響、生徒の意欲の変化、生徒自身の動き、生徒による発展的な取り組みなどについても詳述していくが、このことを通して全国の英語教育関係者の方々に地域教材開発の意義を理解していただき、この取り組みの輪を全国に広めることができればよいと考えている。このことは「目の前の生徒が本当に必要とする教材とは何なのか」についてももう一度考えるきっかけを作ることになると考えており、各都道府県において、各地域が誇りとする歴史、人物、文化、伝統、芸能、自然などについて独自の教材を開発する動きが始まることを願うものである。また、各都道府県で作成した教材の共有化が図られればさらに意義深いものとなる。

そして、最終的にねらいとすることは、各都道府県の学校がこうした地域教材を使って、「教科書を」教える教育ではなく、「教科書で」教える教育を展開し、郷土に深く根ざし、郷土を誇りとして英語で発表し、発信できる生徒を育成し、国際社会で活躍する人材を輩出していくことである。

4 研究方法

4.1 研究仮説

この教材開発は3つの段階を経てきている。第一段階は平成14年度に開発した“15 Stories of Iruma-chiku”である。この段階で私たちは次のような3つの仮説を立てた。

- ① 地域教材を提示することにより、生徒の英語学習に対する意欲が高まる。
- ② 身近な題材を扱った地域教材に触れることにより生徒は刺激され、課題解決のための自主的な活動が展開される。
- ③ 豊かに表現された地域教材により、生徒の英語で表現する力を高めることができる。

小学校の社会科では、地域の歴史や地理について学ぶ児童はいても、中学校で英語の時間に地域に関することを学んでいる生徒は少ないと思われる。この原因はやはり適切な教材の不足であると言える。実際に埼玉県でもこうした教材は皆無である。

ではだれがそれを作るかという問題になる。現実にはだれもない。その原因は一貫した理念、時間、予算、スタッフの不足である。これらの条件を満たすには個人的な取り組みでは限界がある。

私たち人間地区中学校英語教育研究会はこれまで56年間にわたって、こつこつと先輩の先生方が地域の英語教育の振興に貢献しながら、これらの条件を満たすことにも取り組んできた。この流れの中から、英語科教員が「あったらよい教育ができるのに」と願う教材を作る下地も整っているのである。

それと、当地区にはリーダーが常に明確な理念を示して組織を統率する伝統、土曜日、日曜日を使って手弁当で研修する伝統、自分たちで休日に畑仕事などをして得た収益を基金として研究活動を展開する伝統、地区内103校から優秀な教員を募り地区内の研究活動を活性化させる伝統がある。

研究活動が長く続き、常に活発に展開されている理由は、すべての活動が常に「生徒のために」という理念に貫かれているためである。

この理念に基づいて、さまざまな研究活動を展開する中で、今回の教材作成に関する仮説も「立てられた」というよりも「生まれてきた」ものである。

生徒の意欲を高め、自主的活動を促し、表現力を高めることは多年にわたり地域の英語教育の課題として取り組んできたことであり、その研究活動の集大成となる教材作成の実践を通して、3つの仮説を検証していくことになる。

4.2 被験者

入間地区内103校の中学校から1校を抽出し、飯能市立美杉台中学校とした。実践研究であり、数値による比較をねらいとしたリサーチではないので実験群、統制群に分けることはしていない。また、“15 Stories of Iruma-chiku”という教材が主として選択教科としての英語の授業における利用を想定しているため、被験者は平成15年度にこの選択教科としての英語を希望した3年の男子2名、女子16名、合計18名、及び平成16年度に希望した男子13名、女子4名、合計17名である。

4.3 学校及び生徒の様子

飯能市は埼玉県の南西部に位置し、関東平野と秩父山地が接する風光明媚な都市である。美杉台中学校は平成13年4月に開校し、飯能市の南西部、名栗川と成木川に挟まれた美杉台ニュータウンの中にあり、生徒数300名弱の学校である。

保護者や地域の人々の英語教育に関する興味、関心は高く、開校当初から学校の基本理念に「郷土を愛し、世界の中の日本人として、国際的視野に立って社会に貢献できる人間の育成をめざす」を掲げている。

生徒の中には、入学時点で約2割の海外経験のある生徒がおり、基礎・基本の一層の充実の上に、いかに発展的な学習活動を組み込んでいくかが英語科の課題となっている。

4.4 教材の内容

“15 Stories of Iruma-chiku”は図1に示したようなCD-ROMで、入間地区内15市町村がそれぞれ誇りとしている歴史、文化、伝統、芸能などを扱ったCD-ROM教材である。生徒がコンピュータ室でインターネットを利用して調べ学習や課題解決を図ることを想定して埼玉県のホームページなどにリンクが貼ってある。

▼ 図1：“15 Stories of Iruma-chiku”の表面



各セクションは4ページ構成で地区内に15市町村あったため、合計は60ページになっている。各セクションの題材は次のような内容である。

1	川越市	蔵づくり
2	所沢市	航空発祥
3	飯能市	あけぼの子どもの森公園
4	狭山市	七夕
5	入間市	お茶
6	富士見市	水子貝塚
7	上福岡市	舟運
8	坂戸市	お釈迦様
9	鶴ヶ島市	雨乞い祭り
10	日高市	高麗神社
11	大井町	大井戸
12	三芳町	竹間沢車人形
13	毛呂山町	流鏝馬
14	越生町	梅林
15	名栗村	杉

15の話題は同じ形式で統一されており、セクション1からセクション4までの4ページ構成になっている。生徒が慣れ親しんでいる教科書の構成も参考にして、各セクションの構成を次のようにした（各セクションを拡大したものについては資料を参照のこと）。

・セクション1…歴史、文化などを英文で紹介するプレゼンテーション

被験者は飯能市の生徒なので、特に生徒に影響を与えたと思われる飯能市のページ構成を図示した。これは「あけぼの子どもの森公園」にある通称「ム

ーミン谷」を紹介する内容で、写真を大きく配し、生徒が強い興味、関心を示すように提示されている。また、理解を助けるために、本文の下に難しい語彙の注釈を付けてある。

・セクション2…人間地区を訪れた外国人と地域に住む中学生との対話

郷土について話す力を高めるには、学習指導要領にも示されているように、場面に応じた会話を提供することが大切である。そこで、このセクション2では、できるだけ実際に使える表現を盛り込んだ外国人との対話を取り上げることにした。生徒はこれを読み、実際に郷土の誇りについて説明する場面のシミュレーションを行うことができる。生徒の理解を助けるために、ここにも語彙の注釈を付けることにした。

・セクション3…TFやQ&Aなどによる内容理解度のチェック（採点結果を自己採点すると、楽しい評価が記載されている）

英語学習を進めていく上で、内容の理解度をチェックすることは非常に大切なことである。しかも、その評価を自分自身で行えるようにしておくことも効果的な学習を進める上では重要なポイントとなる。

▼ 図2：セクション1の例

3 A Park of Moomin World

Do you know Moomin? Their answer must be "No!" Moomin is one of the characters that are very famous all over the world. Moomin stories were written by Tove Jansson in Finland. Today these stories are read in more than 30 languages around the world. If you have not read them, why don't you go to the park of Moomin world in Hama?

Moomin Kolummunen Area (ムミン谷) was made in 1987. It is located in the north area of Hama. This park is known as "a park of Moomin world" because it has the imagination of Moomin world. In Moomin stories, many different characters live in the same place. They live freely, but they suggest their different ways of life. This park also suggests your own ideas and your own ways of thinking.

There are three main buildings in this park: Moomin House (ムーミンの家), Children's Playhouse (子ども遊び場), and the House in the Woods (森の中の家).

Moomin House is home for anyone who visits this park. You can relax and feel the warmth of this house as if you are entering your own home. In Children's Playhouse, there are a lot of activities for children. For example, you are able to enjoy concerts or storytelling. In House in Woods, you can read Moomin stories or the letters from the writer, Tove Jansson.

Spending time in this park, you will feel that you are in the world of the story. You will open your imagination to the Moomin world, and you can be one of the characters of the story. In this park, there is no certain way you have to follow. Please choose by yourself how to enjoy it. With your own imagination or your own ideas, you can make your own day!

*Tove Jansson : ヨーロッパで有名で1914-2002
ムーミン谷 : ヨーロッパで有名なムミン谷の物語の舞台
*house : (一)に、居る (二)に、住む
*imagination : 想像 (二)に、想像力
*free : (一)に、自由に (二)に、自由に
*storytelling : 物語の読み聞かせ
*discover : 発見する
*character : キャラクター
*suggested : 提案する
*freely : 自由に
*warmth : 暖かさ
*able : できる
*follow : 従う
*choose : 選ぶ
*by yourself : 自分で
*enjoy : 楽しむ
*idea : 考え

そこで、理解度のチェックには TF テストや多肢選択を中心とした Q&A などを10問配置して、生徒の手による自己評価が容易に行えるように工夫した。また、その解答は次のページの下の方に表記し、自己採点しやすくした。そして、自己評価の結果に応じて、10問正解だと「すばらしい！これでもうムーミン達の仲間入り！」、7～9問だと「よくできました」、4～6問だと「もう一息」、3問以下だと「残念、ただちに公園へ直行せよ！」などの楽しいコメントがあり、生徒の意欲を高めるための工夫も盛り込んである。

・セクション4…いよいよ自己表現をするページ（自分が住んでいる市町村の誇りとするものなどを英語で表現する）

研究開発スタッフが最も苦心したのはこのページである。生徒がセクション1から3までを取り組む間に高めてきた意欲を「発信し、発表する力」にまで高めるには、生徒の立場を十分に考えた工夫が必要である。生徒の表現力を高めるには、生徒自らが地域に思いを馳せて記憶をたどったり、調べたり、まとめたりしたくなるようなタスクが必要になる。この、飯能市に関するセクション4では、「あけぼの子ども森公園」の地図をもとに、自分が理想とす

▼ 図3：セクション2の例

イギリスの作家トウェンティ・フーランドの著書「ムーミン谷」(Moomin Valley)に基づいて作られた公園の地図が添付されています。

Kenji: Here is the park I told you about yesterday.
Ms. White: This park is beautiful well with the environment.
Kenji: Yes, it keeps a good harmony with nature.
Ms. White: Oh, look at the house. The shape of the house is very strange.
Kenji: That is called "Moomin House". Moomin House is home for everyone who visits this park.
Lisa: Mom, can I play hide-and-seek in the house. There are a lot of places to hide.
Ms. White: Sure you can.
Kenji: But first of all, let's visit Children's Playhouse. There are a lot of activities for children. There is a special event today.
Ms. White: What is it?
Kenji: Making an original T-shirt, using dye from plants.
Lisa: Wow! Can I try it? I've never made my own T-shirt.
Ms. White: But isn't it difficult? She is only eight years old.
Kenji: I think it's OK. There are teachers who will help the children make them.
Lisa: Is that about the T-shirt making class? I heard that from my friend. Isn't it fun?
Ms. White: The shape of this building is also strange.
Kenji: It is like a snail's shell.
Lisa: This house is made from 100 Japanese cypress trees that were planted around here. In this house, you'll find information about Finland and the writer Tove Jansson. Also, you can read Moomin stories or letters from the writer herself.
Lisa: Kenji, is Moomin a hippopotamus?
Kenji: No, it is a kind of troll living in Northern Europe. Ms. Tove Jansson often listened to a story about trolls in her childhood and wrote Moomin stories.
Lisa: How interesting! Mom, will you read a story on the second floor? There are a lot of books there.
Ms. White: All right.

*Tove Jansson : ヨーロッパで有名で1914-2002
*Moomin Valley : ヨーロッパで有名なムミン谷の物語の舞台
*house : (一)に、居る (二)に、住む
*imagination : 想像 (二)に、想像力
*free : (一)に、自由に (二)に、自由に
*storytelling : 物語の読み聞かせ
*discover : 発見する
*character : キャラクター
*suggested : 提案する
*freely : 自由に
*warmth : 暖かさ
*able : できる
*follow : 従う
*choose : 選ぶ
*by yourself : 自分で
*enjoy : 楽しむ
*idea : 考え

▼図5：セクション4の例



183

5.2 研究課題 2

「身近な題材を扱った地域教材に触れることにより生徒は刺激され、課題解決のための自主的な活動が展開される」という仮説についても、生徒が主体的に判断し、グループ活動を基本にして地域に出かけ、デジカメを持って取材し、インターネットなども活用して資料収集、整理など、ほとんどすべて生徒の手で運営していた。このことから、「課題解決のための自主的な活動が展開される」という仮説はやはり確実に実証された。

5.3 研究課題 3

「豊かに表現された地域教材により、生徒の英語で表現する力を高めることができる」という仮説は、先の図 6 や図 7 で示した作品に表れているように、辞書を利用したり、ALT に尋ねるなどしながら生徒の発想に基づく英文が作成され、その英文の完成度は非常に高く、確実に実証されている。

また、平成16年度の選択教科の取り組みにおいては、テーマが次のようになり、内容の広がりとともに地域的な取材の範囲も広がり、さらに意欲的な取り組みが展開されることとなった。

- ・飯能河原 ・天覧山 ・毘沙門天 ・ハーブ苑
- ・鳥居観音 ・美杉台の自然（動物など）
- ・美杉台中学校について ・飯能祭り

平成16年度の生徒は、先輩の作品を目にしているため、それらを凌ぐ作品作りに力を注いだものと思われる。「天覧山」は「天覧」の語義の説明から始ま

り、地理的な説明、同名の酒の解説、お勧めの登り方などで構成され、市町村で発行するパンフレットや教科書のレベルにでき上がっているのである（図 8、資料 5）。この「天覧山」に限らず、すべての作品が非常に高い水準で仕上がっており、本格的な地域紹介の英文作品群となっている。このように、分量、内容の充実度、英文の精緻さなど、さまざまな観点において、私たち研究開発スタッフも目を丸くするほどに優れた作品群ができ上がっていった。これはまさに「快拳」以外の何ものでもなかった。

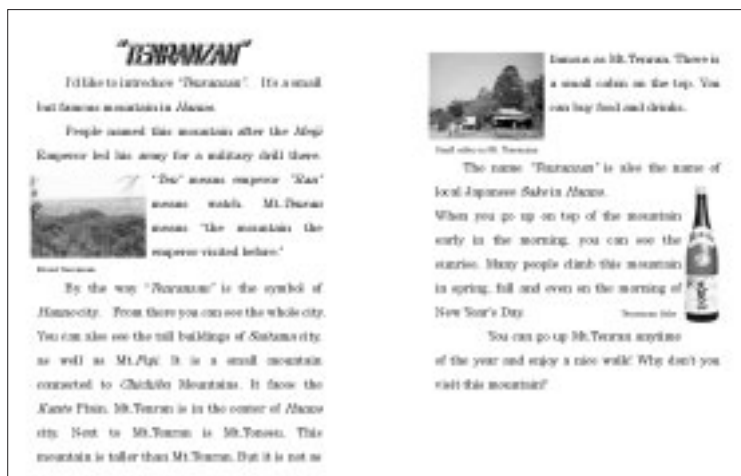
6 考察

このように、地域英語教材の果たした役割がいかに大きなものであったかが証明された。しかしここには、学校における年間指導計画に基づいた綿密な指導と学校をあげての組織的な協力があったことを正確に記述しておかなければならない。特に、平成16年度の取り組みを記録しておくことは極めて大切である。

まず、年間指導計画作りに関しては、次の流れが重要である。

- ① 前年度の CD-ROM の視聴
- ② グループ分けとテーマ決め
- ③ 資料集めと要約文作り
- ④ 英文作り
- ⑤ タイピング

▼ 図 8：生徒作品 3 「天覧山」



⑥ 画像検索と取り込み

⑦ 録音（一部）

さらに、選択教科が個に配慮した教育活動であることを踏まえた視点から、学校として授業の運営に関して次のような計画的、組織的な展開がなされていた。

① 選択教科における「個に応じた指導」

- ・辞書の活用
- ・グループの活用…協同学習（能力差への対応）
- ・コンピュータの活用
- ・ALT の活用
- ・コンピュータの得意な職員の協力

② 選択教科における指導内容、指導方法の工夫・改善

- ・発展学習の試み
- ・Reading から Production への転換→生徒主体の意欲的な活動へ
- ・「自分たちの作品を作る喜び」の実感へ
- ・コンピュータの活用→資料集め、英文タイプ、画像貼り付け＋音声録音
- ・画像などの著作権の考慮
- ・発信活動→発表会、CD-ROM 作成、配布へ（生徒、市内中学校へ）、飯能市の姉妹都市の高校へも送る。ホームページ掲載

③ 国際理解教育…郷土に根ざした国際感覚の育成

- ・自分の足下を知り、説明できる。
- ・“15 Stories of Iruma-chiku” の活用
- ・郷土の歴史や文化についての発見、再認識
- ・郷土について英語で説明する方法
- ・郷土について、外国人としての視点を持つ ALT に学ぶ

というように、美杉台中学校では、学校の中での選択教科の位置付けが明確であること、国際理解教育の視点にも基づいてそれぞれの教科を大切にしていること、学校全体で組織的な教育を行っていたのである。このことが果たした役割は非常に大きかったものと思われる。言ってみれば、“15 Stories of Iruma-chiku” の歯車と学校の歯車が噛み合わさって回転した。そのことの成果が今回の作品群となって表れたものと言える。

今回の2年間にわたる取り組みを振り返って高橋常雄先生が述べておられる言葉がこの教材の意義を

伝えてくださっている。

“15 Stories of Iruma-chiku” の作品にかかわった経験が、それを利用した取り組みを展開する中で、Reading から Production（作品作り）への移行を可能にしてくれました。そして、自分たちで郷土について英語で紹介する作品を作ることができたという自信、その作成過程での「創る喜び」を生徒たちにプレゼントすることができたことが一番の成果です。周囲の協力もあり、音声付きの CD-ROM まで作成でき、ホームページ化も含めて、発展的な活動になれる可能性があることがわかりました。

この言葉からもわかるように、生徒の自信が英語科教員の自信や確信につながっていったのである。

6.1 考察を生かした取り組み1

地域教材が生徒や教員に与える影響の大きさを実証したことを受け、平成16年度には取材範囲を埼玉県全体に広げ、埼玉県内の英語科教員が中心となって、“15 Stories of Saitama-ken”（埼玉県の15の物語）を作成した。その内容は次のとおりである。

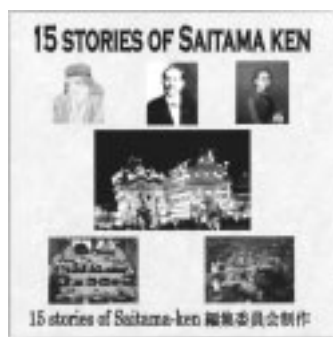
- | | | |
|----|-------|------------|
| 1 | さいたま市 | 宇宙飛行士 若田光一 |
| 2 | 草加市 | 草加せんべい |
| 3 | 北本市 | 石戸蒲桜 |
| 4 | 小川町 | 和紙 |
| 5 | 秩父市 | 秩父夜祭 |
| 6 | 長瀨町 | 岩畳 |
| 7 | 児玉町 | 塙 保己一 |
| 8 | 深谷市 | 渋沢栄一 |
| 9 | 妻沼町 | 荻野吟子 |
| 10 | 川本町 | 畠山重忠 |
| 11 | 行田市 | さきたま古墳 |
| 12 | 加須市 | 鯉のぼり |
| 13 | 岩槻市 | 雛人形 |
| 14 | 庄和町 | 百畳敷の庄和の大風 |
| 15 | 吉川市 | なまず |

この企画を練る段階では、埼玉新聞社が平成12年6月に発行した「県民投票で選ばれた…21世紀に残したい 埼玉ふるさと自慢100選」が貴重な資料となった。この本の中には彩り豊かな「彩の国」を象徴

する名所、人物、祭りなど100の内容が写真入りで網羅されており、原案を作成する段階で非常に役立った。

第1回の企画会議では、原案をもとにしてスタッフ16名の考えも生かしながら、内容の検討を行った。編集の方針としては、郷土の歴史、文化などを誇りとして生徒が自ら学習に取り組み、発表し、発信する力を高める教材作りを心がけることにした。そこで、CD-ROMの表面にも制作者の願いや意図が盛り込まれるように写真を配列した。

▼ 図9：“15 Stories of Saitama-ken”の表面



この表面には、岩槻の雛人形とさきたま古墳が下に配列され、秩父夜祭が中央に、そして塙保己一、渋沢栄一、荻野吟子の3人の偉人が掲げられている。これらの写真には「中学生の皆さんは、3人の偉人と同じ豊かな自然の中で生まれ、伝統の行事を経験しながら育ったわけですから、郷土の祭りを愛し、先人を誇りとしてしっかり勉強すれば、先達と同じように日本や世界に貢献できる人になれますよ」というメッセージが込められている。これが、この地域教材開発の理念である。

分担を決めた後は、各スタッフが5月から夏休みにかけて現地や関連の資料館などに出かけて取材を行った。そして、夏休みの最終日曜日に第2回の編集会議を開いて、取材のまとめと原案の発表を行った。そして、9月から本格的に教材の執筆を開始し、毎月1回のペースで編集会議を開催し、でき上がった原稿についてチーム分けをして、読み合わせをした。このように数度にわたる校正を重ね、各自が持ち帰った原稿はそれぞれの学校でALTによるネイティブチェックを受けた。そして、1月には持ち寄った原稿を1枚のCD-ROMに編集して、所沢市立安松

中学校のコンピュータ室で県内423校分のCD-ROM作成を行った。そして、3月中に代表が各教育事務所を回って、市町村別に仕分けしたCD-ROMを文書箱に入れさせていただいて、県内の各中学校に配布したのである。

6.2 考察を生かした取り組み2

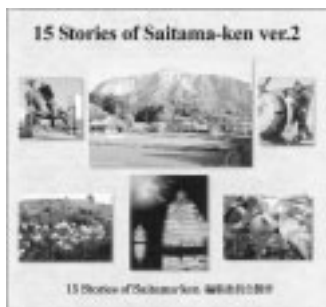
この“15 Stories of Saitama-ken”については平成16年7月5日発行の『STEP 英語情報』7・8月号（日本英語検定協会）に岩槻の雛人形を扱った4ページも具体例として掲載した上で、全国的にPRしていただいた。

平成17年度には、前回のスタッフも残しながら、新たに数名のスタッフを迎え、やはり合計16名によって、“15 Stories of Saitama-ken” Ver.2の作成を開始した。取り上げたテーマは、埼玉の自然、芸能、歴史上の人物、産業、文学、美術、スポーツなど多岐にわたっており、前回の“15 Stories of Saitama-ken”よりも幅の広い内容になっている。特に、スポーツについては、地元埼玉に球場があるサッカーや野球についても取り上げ、スポーツ好きの生徒の興味、関心を高めるように工夫してある。さらに、文学、美術などの分野もテーマとして取り上げてあり、芸術志向の強い生徒も満足できるようにしてある。このように、前回の作品と比較して、まず内容面で一層の工夫がなされており、生徒が今まで以上に意欲的に取り組める教材に改善した。具体的な項目を挙げると、下記のとおりである。

- | | | |
|----|-------|-------|
| 1 | さいたま市 | サッカー |
| 2 | 所沢市 | 野球 |
| 3 | 熊谷市 | 熊谷直実 |
| 4 | 越生町 | 太田道灌 |
| 5 | 上里町 | 西崎きく |
| 6 | 羽生市 | 田山花袋 |
| 7 | 東松山市 | 丸木美術館 |
| 8 | 川口市 | 鋳物 |
| 9 | 安行 | 植木 |
| 10 | 春日部市 | 桐たんす |
| 11 | 越谷市 | 武州だるま |
| 12 | 菖蒲町 | あやめ |
| 13 | 寄居町 | 玉淀 |
| 14 | 秩父市 | 武甲山 |
| 15 | 白岡町 | 梨 |

今回の CD-ROM 表面の写真も、教材開発の理念に基づいて構成されており、生徒が生まれ育った埼玉を愛し、郷土について発信し、発表する力を高めながら、国際社会で活躍する人材に育っていくことを願って作られている。

▼ 図10：“15 Stories of Saitama-ken” Ver.2 の表面



この Ver.2 では、“15 Stories of Iruma-chiku”を読んだ飯能市立美杉台中学校の3年生がALTに頼んでCD-ROMに音声入力したことに触発され、研究開発スタッフの面子にかけて、これに負けないように音声入力は必須との考えでスタートした。幸い、所沢市立教育センター指導主事の北田耕一先生のご協力により、ALTのDavid WatkinsさんとDonna Sewellさんのお二人が全編のセクション1とセクション2を録音してくださった。お二人の発音は非常に聞き取りやすく、これにより生徒が音声で内容の把握をすることもできるようになり、教材としての利用方法を広げること成功し、利用価値を一段と向上させることができた。

取材方法は“15 Stories of Iruma-chiku”を作成した時から採用している現場主義を貫いた。つまり、取材先の現地に赴き、関係者の方々から体験話などを伺う中で、教材作りのもとを手に入れる方法である。このことは、スタッフの後日談にもその大切さが語られている。

また、でき上がったCD-ROMの利用を促すために、教材とともにプリントアウトしたものを埼玉県教育委員会義務教育指導課の先生にもお渡しして、研修会などで紹介していただくようお願いしている。

さらに、教材完成後には読売新聞の埼玉版や埼玉新聞などの新聞が内容紹介の記事を掲載し、全県に

PRしてくださった。今回のVer.2の場合は、読売新聞の記事を読んだ地元埼玉のFM放送局、NACK5が内容紹介の放送を流してくださった。

このように、教材の完成度と生徒の取り組みを評価してくださる方々が積極的に教材の利用を呼びかけてくださっている。

6.3 “15 Stories of Saitama-ken” Ver.2 を使った実践報告（記述）

- (1) 対象生徒：所沢市立東中学校、選択英語を受講した生徒25名
- (2) 教材内容：サッカー（The history of soccer in Saitama）

- (3) 授業の流れ：

- ① セクション2（対話文）を黙読する。
- ② セクション3（Let's Check!）のTFに答える。
- ③ セクション1（本文）を黙読する。
- ④ セクション3のQ&Aに答える。
- ⑤ 課題終了者はセクション4（Now it's your turn!）に取り組む。

- (4) 生徒の様子：教材の趣旨説明をした後、正味40分間で教材に取り組ませ、そのうちTFやQ&Aの時間は10分で、全員の生徒が解答を終えた。その後、答え合わせをして感想を記入させた。

- (5) 生徒の感想

＜テーマについて＞

- ・題材がサッカーのワールドカップについてで、興味があるので読んでいて楽しかった。
- ・埼玉のサッカーの歴史なんてほとんど知らなかった。問題を解きながらサッカーの歴史を学べて楽しかった。
- ・字が多く感じたが、読んでみると思ったよりも内容がわかった。サッカーが王様に反対されていたなんて、驚きました。
- ・話の内容により、読む気がする。

＜このような教材について＞

- ・長文を読む練習になってよいと思う。
- ・教科書以外にいろいろと読めて楽しい。
- ・写真が入っていて、英文だけよりもいいと思った。

7 研究成果普及のために

今後各都道府県においてこのような教材開発の取り組みが行われることを期待してこの論を展開してきたが、この実現のためには、教材作成の舞台裏も記述しておくことが大切と考える。そこで、スタッフに対して、教材完成後にアンケート調査を行い、「教材作りに取り組んだ感想」と「今後作成する人たちへのアドバイス」をまとめておいた。それらは、次のようなものである。

＜地域教材作りに取り組んだ感想＞

- ・身近な地域のことにに関して、自分自身の足を使って調べていくことは、とても興味深く、かつ楽しい作業でした。最初に取り組んだのは自分の住んでいる地域でしたが、案外知らないことも多く、地名の由来なども知ることができました。博物館の館長さんにお話を伺ったり、役場の方に快く資料をいただいたりすることもでき、人との交流も楽しめました。足を運んで実物を見る、話を聞く、(お土産をかう)などの楽しみがあったからこそ、忙しい日常の中で取り組んでこられたのだと思います。

実際に取り組むまでは「大変かも」という思いがありましたが、始めてみると興味もわいてくるし、なにより現地調査をしてみることでどんどん書き進めることができました。

- ・自分の住んでいる県のことで、知らない地域や産業、文化が多いことに気づかされた。担当地域のことを調べたり、他の先生の取材報告を聞いて、自分自身も地域のことを勉強できた。大人の「総合的な学習」のような気持ちである。何よりも、自分の生徒に教師の手作りの教材を提供できるということはうれしい。生徒の反応や感想に耳を傾け、さらに上質の教材提供ができれば、と考える。
- ・なかなかよいアイデアが出てこなくて苦しみました。取材に行ったり、先生方からアドバイスをいただき、少しずつ形ができてくると楽しくなってきました。完成を目の前にして選択授業で生徒にやってもらい、ALT も協力してくれました。Now it's your turn! で生徒が作ってくれた作品はとても楽しいものが多く、イラスト入りではほえましかったです。このプロジェクトに参加できてよかった

たと思います。

- ・改めて生徒の側に立った教材の見直しをすることができ、大変学習になりました。
- ・どうすればよいものになるのか悩んだときには、先輩の先生方からのアドバイスをいただくことができたので非常に心強かったです。自己表現活動を作る際にも生徒が書きたくなる題材を試行錯誤しながら考えました。この教材作成に取り組んだおかげで他の教材を見る「視点」を鍛えることができたのではと思っています。
- ・休日返上で編集会議を開いたが、決して苦痛ではなかった。それよりも、他市の先生方と英語をはじめとするいろいろな情報交換をする機会となり、有意義な時間を持つことができた。

＜今後地域教材を作成する人たちへのアドバイス＞

- ・やはり現地に足を運び、実際にそれについて触れることが一番大事だと思います。
- ・生徒と一緒に作成する気持ちでいると楽しくできると思います。目の前にいる生徒のために使えるようなものを想定してみるとアイデアが出てくるのではないのでしょうか。
- ・生徒が読んで「面白い」、「なるほど」、「勉強になった」と思う作品をめざすことです。CD-ROM 化は重労働ですが、これからは必要でしょう。
- ・いろいろな人の目を通して完成させた方がよりよいものができるので、最低でも2～3回は他の人に読んでもらった方がよいと思います。
- ・編集会議の時に自分の分担が思うように進んでいないということもある。そんな時に、引け目を感じて参加を遠慮する、というのではなく、思い切ってどこを悩んでいるか、仲間に相談することが大切である。煮詰まっていたが、メンバーのアイデアでそれが解消できたという場面が多々あった。また、自分の教材を他の観点から見てもらうことで、いろいろな助言をもらい教材が優れたものになるのである。
- ・Now it's your turn! には、それぞれ個性的な課題が集まっていて、先生方のアイデアの豊かさに感心していますが、次回作成に当たる方たちがさらに個性的な課題を練り出してくれたらさらに面白いと思っています。
- ・協力してくださった団体には、でき上がったものをお礼としてぜひ贈りたいですね。

8 | まとめ

私たち教員は何か新しいことに取り組もうとするとき、「予算がない」、「スタッフが足りない」という不平や不満を言うことがある。そして、「こういう教材があったらいいな」と思いながらだれも作らないということもある。こうした場合に、取り組まない理由を丹念に掘り下げていくと、ほとんどすべての場合、次のような結論にたどり着く。それは、生徒のためになんとかしようという理念が不足している、という悲しむべき事実である。

この地域教材開発プロジェクトは、生徒のために研究活動を積み重ねてきた入間地区中学校英語教育研究会の伝統を生かしながら、その基本理念を前面に掲げ、予算を確保し、スタッフを募り、意欲ある英語科教員の自主的な活動によって完遂されたものである。この論文で、取材の仕方から校正、CD-ROM化、音声入力、生徒の主体的取り組み、教員のアドバイスなどについて、多角的に論じてきた。ここに記述されたことがきっかけとなり、各都道府県でその地に住む生徒のために、新たな地域教材が開発され、真に国際社会で活躍する生徒が育成され

ていくことを心から願うものである。

謝 辞

このような、発表の機会をくださった(財)日本英語検定協会会長の羽鳥博愛先生に心から感謝申し上げます。羽鳥先生には東京学芸大学での長期研修中に大学院の講座に参加させていただき、ご指導をいただきました。あわせて感謝申し上げます。また、和田稔先生には研究助成の際に、生徒の反応や意欲化が図られた実例で検証していくようにご指導をいただきました。先生のアドバイスのおかげで、研究実践の方向性を定めることができました。ありがとうございました。

さらに、この地域教材開発を積極的に評価し、支援してくださった埼玉県教育委員会の菅野健先生、豊田尚正先生、森澤清先生、西部教育事務所をはじめとする各教育事務所の所長様、埼玉県中学校英語教育研究会会長の佐藤良先生、大澤敬司先生、所沢市立教育センターの北田耕一先生、ALTのDavid WatkinsさんとDonna Sewellさんのお二人、実践と検証に積極的にかかわってくださった飯能市立美杉台中学校の高橋常雄先生と生徒たちにも心から感謝申し上げます。

参考文献 (*は引用文献)

*『県民投票で選ばれた…21世紀に残したい 埼玉ふるさと自慢100選』平成12年6月30日発行、埼玉新聞社。

*『STEP 英語情報』7・8月号、平成16年7月5日発行、日本英語検定協会。

資料1：セクション1の例

3 A Park of Moomin World

Do you know Moomin? Your answer must be “Yes”. Moomin is one of the characters that are very famous all over the world. Moomin stories were written by Tove Jansson in Finland. Today these stories are read in more than 30 languages around the world. If you have not read them, why don't you go to the park of Moomin world in Hanno?

Akebono Kodomonomori Koen (あけぼの子ども森公園) was made in 1997. It is located in the south area of Hanno. This park is known as “a park of Moomin world” because it has the imagination of Moomin world. In Moomin stories, many different characters live in the same place. They live freely, but they respect their different ways of life. This park also respects your own ideas and your own ways of relaxing.



There are three main buildings in this park: Moomin House (ムーミン屋敷), Children's Playhouse (子ども劇場), and the House in the Woods (森の家). Moomin House is home for anyone who visits this park. You can relax and feel the warmth of this house as if you are entering your own home. In Children's Playhouse, there are a lot of activities for children. For example, you are able to enjoy concerts or storytelling. In House in Wood, you can read Moomin stories or the letters from the writer, Tove Jansson.

Spending time in this park, you will feel that you are in the world of the story. You will open your imagination to the Moomin world and you can be one of the characters of the story. In this park, there is no certain way you have to follow. Please discover by yourself how to enjoy it. With your own imagination or your own ideas, you can make your own day!

*Tove Jansson : トーベ・ヤンソン(1914-2001)

「ムーミン」を書いたフィンランドの童話作家

*locate : (～に) 位置する

*character : キャラクター 登場人物

*imagination : 想像(力)

*respect : 尊重する

*as if : ～のように

*warmth : 温かさ

*storytelling : 物語など話をする事

*certain : 特定の 限定された

*discover : 発見する

イギリスからやってきたホワイト(White)さんとその娘リサ(Lisa)が観光客に任む健二(Kenji)と一緒にあけぼの子ども森公園に遊びに来ました。

Kenji: Here is the park I told you about yesterday.

Ms. White: This park is balanced well with the environment.

Kenji: Yes, it keeps a good harmony with nature.

Ms. White: Oh, look at the house. The shape of the house is very strange.

Kenji: That is called "Moomin House." Moomin House is home for everyone who visits this park.

Lisa: Mom, can I play hide-and-seek in the house. There are a lot of places to hide.

Ms. White: Sure you can.

Kenji: But first of all, let's visit Children's Playhouse. There are a lot of activities for children. There is a special event today.

Ms. White: What is it?

Kenji: Making an original T-shirt, using dye from plants.

Lisa: Wow! Can I try it? I've never made my own T-shirt.

Ms. White: But isn't it difficult? She is only eight years old.

Kenji: I think it's OK. There are leaders who will help the children make them.

Lisa は草木染めでTシャツづくりをしました。Tシャツが乾くのを待っている間、3人は「森の家」に行ってみました。

Ms. White: The shape of this building is also strange.

It is like a wave of logs.

Kenji: This house is made from 149 Japanese cypresses from the mountains around here. In this house, you'll find information about Finland and the writer Tove Jansson. Also, you can read Moomin stories or letters from the writer herself.

Lisa: Kenji, is Moomin a hippopotamus?

Kenji: No, it is a kind of troll living in Northern Europe. Ms. Tove Jansson often listened to a story about trolls in her childhood and wrote Moomin stories.

Lisa: How interesting! Mom, will you read a story on the second floor? There are a lot of books there.

Ms. White: All right.

*balance: 調和がとれている *environment: 自然環境 *nature: 自然

*hide-and-seek: かくれんぼ *dye: 染める *wave: 波 *log: 丸太

*cypress(es): しのき *hippopotamus: ひば *troll: (北欧神話の)小人、妖精



資料3：セクション3の例

Let's check!

A park of Moomin world を読んで下の問いに答えてみよう。

- 1 The stories of Moomin are read all over the world. (T F)
- 2 The stories of Moomin were written by Tove Jansson. (T F)
- 3 *Akebano Kodomomori Kiow* was made in the south part of Finland. (T F)
- 4 The nickname of this park is "Children's Playhouse." (T F)
- 5 This park keeps a good harmony with nature. (T F)
- 6 There are many activities at Children's Playhouse. (T F)
- 7 Lisa enjoyed listening to the concert in the Children's Playhouse on that day. (T F)
- 8 You can read the letter from Tove Jansson in this park. (T F)
- 9 The cypresses used in this park are brought from Finland. (T F)
- 10 Moomin is a hippopotamus. (T F)



Perfect! : すばらしい!!
 これでもムーミン達の仲間入り!
 7～9問: よくできました!「子ども劇場」で
 コンサートを楽しんでね。
 4～6問: もう一息!「森の家」に行って
 色々な資料を読んでみよう。
 3問以下: 残念!
 ただちに「あけぼの子どもの森公園」
 へ直行せよ!

3・3

Now it's your turn!

『ムーミン童話』の世界では、登場人物達がそれぞれの生き方を尊重しながら自由に生き生きと暮らしています。そんな物語の世界を取り入れた公園が『あげぼの子ども森公園』です。自然を大切にすること、お正しを大切に作る温かい心、自由で夢のある発想があふれた場所です。

さて、皆さんのアイディアで公園を作るとしたらどんな公園を作りたいですか。理想の公園の絵または地図を描き、その公園の説明を英文で書いてみましょう。



(例)

The name of this park is "Akeboko Kodomonori Koen."
This park is in a valley. A small river runs through the valley. There are three main buildings in this park. The shape of the buildings is unique. You can enjoy a lot of activities in the park.

こんな公園あったらいいなあ！

<説明>

Let's check! の答え

1 T 2 T 3 F 4 F 5 T 6 T 7 F 8 T 9 F 10 F

資料 5：生徒作品 3 「天覧山」

“TENRANZAN”

I'd like to introduce "Tenranzan". It's a small but famous mountain in *Hazono*.

People named this mountain after the *Meiji* Emperor led his army for a military drill there.



Mount Tenranzan

"Ten" means emperor "Ran" means watch. Mt. Tenran means "the mountain the emperor visited before."

By the way "Tenranzan" is the symbol of *Hazono* city. From there you can see the whole city. You can also see the tall buildings of *Saitama* city, as well as Mt. *Fuji*. It is a small mountain connected to *Chichibu* Mountains. It faces the *Kanto* Plain. Mt. Tenran is in the center of *Hazono* city. Next to Mt. Tenran is Mt. *Tonosu*. This mountain is taller than Mt. Tenran. But it is not as



Small cabin on Mt. Tenranzan

famous as Mt. Tenran. There is a small cabin on the top. You can buy food and drinks.

The name "Tenranzan" is also the name of local Japanese Sake in *Hazono*.

When you go up on top of the mountain early in the morning, you can see the sunrise. Many people climb this mountain



in spring, fall and even on the morning of New Year's Day.

Tenranzan Sake

You can go up Mt. Tenran anytime of the year and enjoy a nice walk! Why don't you visit this mountain?